

「律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」このように、イエスに尋ねたファリサイ派の律法の専門家は、何を知ろうとしてこのように尋ねたのでしょうか。注意して今日の福音を読み返してみると、イエスを試そうとして、彼はこのような質問をしたと言われていています。それでは、この律法の専門家はイエスの何を試そうとしてこのような質問をイエスに投げかけたのでしょうか。

ユダヤの人々、中でもファリサイ派の律法学者のような敬虔な人々にとっては、律法の掟を守って生きるということが、神のみ前に正しく生きるということであったのです。何故なら、ユダヤの人々にとっては、律法の掟の全ては神がモーセを通して与えられたものだからです。神が与えてくださった律法の掟を一つ一つ忠実に守り行うことが、神が求めておられることであり、そのように示されている神の求めに応じて生きることが、神のみ前に正しく生きるということだからです。

福音書の中の多くの箇所が登場するファリサイ派の人々は、このような信仰に基づく理想のもとに生きようとした人々です。律法の専門家と呼ばれている人々は、そのような人々の間にあつて尊敬を集め、頼りにされる立場にあつた人々です。律法に関する専門的な学識によって、具体的な生活の状況の中でどのように生きることが律法の掟に適う生き方であるか指導する立場にあつたからです。

そのような人々にとって、自分も含めた人に対する評価の基準は、その人が律法の掟に従って生きているかどうかということになることはごく当然なことであるとも言えます。律法の掟に従って生きるということが、神のみ前に正しく生きるということであり、神のみ前に正しくあるということが、たとえ自分たちの現実がどうであれ、イエスが生きられたユダヤの社会の人々の心の奥底に刻み込まれた確固とした価値基準であつたからです。そのような価値基準が暗黙のうちにも、なお人々の心のうちに深く生きている社会にあつて、ファリサイ派の人々や律法の専門家たちは、ユダヤの社会の一般の人々から尊敬の目で見られ、彼らも自分たちに向けられているそのような尊敬を、自分たちの権威の拠りどころとしていたのです。つまり自分たちがユダヤの社会の正当な精神的リーダーであるとの自負をもって生きていたのです。

そのような人々にとって、ガリラヤのナザレという旧約聖書の中にその地名も出ていないような寒村出身のイエスという人物が、その言動によって、多く

の民衆の心を捕らえ、預言者だとか、もしかすとメシアかもしれないともてはやされていることは、まさに、聞き捨てならないことであったのは当然のことであったと思われます。イエスの経歴にはどこを探しても、当時名前の知られた律法の専門家の下について律法の掟を本格的に学んだ形跡がないと思われたからです。むしろ、イエスの活動の始めから、イエスとその信奉者となったイエスの弟子たちの行動に疑いの目を向けていたファリサイ派の人々がもたらした報告によれば、イエスは公然と安息日の掟を破り、律法の掟とは縁遠い生活をしている徴税人や娼婦といった罪人と言われていた人とも親しく交わり、食事の前に身を清めるというようなごく日常的なユダヤの人々の生活慣習にも従おうとはしなかったのです。そのような人物であるイエスが、権威ある者であるかのように、律法の掟を巡って自分たちと対立し、自分たちの生き方に批判を向けることは、彼らのプライドが許さなかったのです。

「律法の中でどの掟が最も重要な掟ですか」とイエスに問いかけた律法の専門家は、自分たちのプライドにかけて、人々に認められているその権威の高みからイエスにこのように問いかけているのです。自分たちがそれに全てをかけている専門領域にイエスを引き込んで、イエスの律法理解の中途半端さを人々の目に明らかにさらけ出させようとしたのです。彼らにはそのような自信があったのです。そのために彼らは集って協議をした上で、このような質問をイエスに浴びせたのです。

イエスは、このような質問をご自分に向けた人々の心のうちを見通しておられるかのようにです。しかし、そのような質問の前に立たされたイエスの答えには、落ち着いた、しかも素朴な率直さが感じられます。イエスが第一の掟として挙げられた「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」と言うことばは、ユダヤの人々が毎日朝に夕に唱えていた祈りのことばです。これが、最も大切な神から与えられた掟であることは、ユダヤ人であれば物心ついたころから、ともに祈る家族の祈りを通して身にしみ知っていることであるはずで、この掟はそうにしてユダヤの人々中に受け継がれてきた、まさにユダヤの人々の神の民としてのアイデンティティーの拠りどころとなっている信仰を表明する掟であり祈りなのです。そのようにしてこの掟に親しんできたユダヤの人々の生活の中に、イエスは文字通り足を地に着けて、先の質問に答えておられるのです。イエスの答えの落ち着いた、素朴で率直な印象は、そのようなところから来ているのです。

イエスに答えを迫った質問者は、最も重要な掟は何かと問うているのに対して、イエスは第一の掟に続いて第二の掟を上げられ、しかもこの二つの掟は兄弟のような関係にあるとお答えになっています。イエスが第一の掟と同じように重要なものとして上げられた掟は、今日の第一朗読で聴いたように、律法の

掟の中でも特に強調されている掟です。旧約の預言者たちが繰り返し人々に注意を喚起したのも、安息日の掟や、神へのささげもの規定には忠実さを示していた人々も、このような掟にはそれほど注意を払わなかったからです。安息日の掟は安息日だけのものであり、神へのささげものは定められた祭りの時だけのものです。それに対して、貧しい隣人に対する配慮は日常的なことであり、日常の生活において面倒を背負い込むことでもあるのです

ルカ福音書において、同じ質問を受けたイエスが語られたサマリア人の話を私たちは知っています。イエスにとって、隣人を自分のように愛するとは、あのサマリア人のように生きるということです。そしてそれは、もはや、わざわざ律法の専門家のところへ行って、学ばなければならないことではなく、それぞれの自分の心に刻まれている人間としての善意に答えるかどうかの問題なのです。イエスはそのような人の心の善意を信じる素朴な人々の中に足を置いて、律法の専門家の間に答えておられるのです。

けれども、イエスが私たちに示してくださったことは、これだけのことではありません。隣人を自分のように愛するという掟を、神への愛の掟と並べられたイエスは、ご自分の全生涯をかけてその掟を生きられたのです。十字架にかけられてその生涯を私たちのためにささげてくださったイエスは、私たちに隣人としてくださり、隣人である私たちの、神の掟に従って生きることの出来ない悲しみと、それゆえの惨めさを知ってくださり、そのような隣人である私たちのために、神のゆるしを乞うために十字架の上に死んでくださったのです。

今日の福音で、イエスが私たちにも示しておられる神の掟は、そのようなイエスが私たちに、これが神の掟なのだとして示してくださった掟です。神の掟は今や、私たちにとって、私たちのために十字架の上に死んでくださったイエスの想いの中にある神の掟なのです。そのようなイエスの想いに応えることが、神の掟に従って生きるための私たちの出発点となるのです。イエスが生きられたように、素朴に神を愛し、イエスが示されたように、わたしたしの周囲に今も生きている多くのよきサマリア人である人々の手本に学びながら、私たちも自分の中にある善意に信頼し、それに従って生きる恵みを願って今日のミサをもにささげたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高